

棕の道草 第31回

失われゆくもの

内田創太

大瀧詠一、細野晴臣、松本隆、鈴木茂といった錚々たるメンバーにより結成され、主に1970年代前半に活動していたロックバンド、はっぴいえんど。彼らの作品に、『風街ろまん』というアルバムがある。

この『風街ろまん』は、1964年のオリンピック開催に象徴される開発・近代化によって失われていった古き良き東京の姿を、「風街」という架空の街として表現してみせた作品だ。

ところで、「失われゆく東京を描いた」という話を聞くと、私にはある一冊の句集が思い浮かぶ。水原秋櫻子の第一句集、『葛飾』である。

梨咲くと葛飾の野はとの曇り

葛飾や桃の籬も水田べり

『葛飾』には、秋櫻子が少年時代から訪れていた葛飾の風景が多数収められている。それらの多くは詠んだ当時の景ではなく、秋櫻子の記憶にある昔のものだという。秋櫻子が心に留めていた景色は俳句として残り、現在を生きる私たちの頭の中にも、美しくかけがえのないものとして像を結ぶ。

話は変わって、JR 三鷹駅南口から西へしばし歩いたところに、太宰治が通ったことで有名な跨線橋がある。10年以上この地域で暮らしている自分にとって、非常に馴染み深く思い入れの強い場所である。この跨線橋だが、老朽化に伴う安全管理のノウハウやコストの問題で、近い将来に撤去されてしまう可能性が高まっている。

思い入れが強いと言っても、安全管理のノウハウやコストという課題に対して、残念ながら自分にはあまりに無力だ。そんな自分にできることは、失われゆくものを忘れないように記憶しておくことだけだと思う。

どんなにそのままでいてほしいと願っても、自然も街も人もどんどん変わってってしまう。ならば、せめてそれらをいつまでも憶えていたい。別にそんな大仰なことを常に考えつつ生活、句作をしているわけではないが、それでも、自分が俳句に向かう根底にはどこかそのような気持ちがある気がしている。

